

2026の臨海 1986

参蘇飲

伊藤 剛

原典：『太平惠民和劑局方』(卷二、傷寒)

感冒、発熱頭疼ヲ治ス。或ハ痰飲凝節ニ因リ、兼ルヲ以テ熱ト為ス、並ニ宜シク之ヲ服スベシ。

参蘇飲

治感冒發熱頭疼、或因痰飲凝節兼以為熱、並

宜服之。若因感冒發熱亦如服養胃湯法以被蓋臥連進數服微汗即愈尚作面有餘熱更宜徐徐服之自然平治因痰飲發熱但連日頻進此藥以熱退為期不可預止雖有前胡乾葛但能解肌耳既有枳殼橘紅葶自能寬中快膈不致傷脾兼天治中脘痞滿嘔逆惡心開胃進食無以踰此母以性涼為疑壹切發熱皆能取效不必拘其所因也小兒室女亦宜服之

陳皮 去白
甘草 炙
紫蘇 用葉
人参 去蘆
枳殼 去穢炒
木香 各半兩
乾葛 洗
茯苓 去皮各半分
前胡 去苗
半夏 湯洗茶
次薑 製

和劑局方卷二 ○十七

滓微熱服不拘時候易簡方不用木香只拾味

他の古典：『万病回春』(卷之二、咳嗽) (卷之七、咳嗽) 龔廷賢

脈 咳嗽の因る所。浮は風。緊は寒。數は熱。細は濕。房勞は瀰瀰。右關の微瀰は、飲食、脾を傷る。左關の弦短は、肝極めて勞疲。肺脈の浮短は、咳嗽期を与にす。五藏の嗽は、各本部を視よ。浮緊は虛寒。沈數は実熱。洪滑は痰多し。弦滑は血少なし。形盛んに、脈細なるは、以て息するに足らず。沈小、伏匿は、皆是れ危脈なり。惟だ浮大にして嗽する者は生く。

春は是れ上升の氣。夏は是れ火、炎上すること最も重し。秋は是れ濕熱、肺を傷る。冬は是れ風寒、外に束ぬ。

四時の感冒、一切の咳嗽、發熱、吐痰は、直しく風邪を發散すべし。

○参蘇飲、四時の感冒、發熱、頭疼、咳嗽、痰多、涕唾稠粘、中脘痞滿して痰水を嘔吐するを治す。中を寛くし、膈を快くす。脾を傷ることを致さず。此の藥、大いに肌熱を解し、將に勞とならんと欲して痰咳、喘熱するに、最も効あり。

紫蘇、桔梗、枳殼、陳皮、半夏、茯苓、各一錢、前胡、乾葛、各一錢、甘草、人参、各七分、熱嗽するには之を去る、木香、五分、氣盛なる者には之を去る。

右對み一劑。生姜、漿子を煎して、食後に温服す。○若し天寒の感冒、惡寒して汗なく、咳嗽、喘促し、或いは傷風、汗なく鼻塞がり、声重く、咳嗽するには、並びに麻黄(二錢)、皮を去りたる杏仁(二錢)、金沸草(二錢)を加え、汗を以て之を散す。○若し初め感冒し、肺、多く熱あるには、杏仁、黄芩、桑白皮、烏梅を加う。○肺寒の咳嗽には、五味子、乾姜を加う。○心下痞悶し、或いは胸中煩熱し、或いは酒を停めて散せず、或いは嗜雜、惡心するには、黄連、枳實(各一錢)を加え、乾葛、陳皮、倍して之を用う。○胸滿、痰多きには、瓜蒌仁(二錢)を加う。○氣促、咳嗽には、知母、貝母を加う。○鼻衄には、烏梅、麥門冬、白茅根を加う。○心盛んに、發熱するには、柴胡、黄芩を加う。○頭痛には、川芎、細辛を加う。○咳嗽、吐血には、升麻、牡丹皮、生地黄を加う。○勞熱の咳嗽、久しく愈えざるには、知母、貝母、麥門冬を加う。○血を見ずには、阿膠、生地黄、烏梅、赤芍薬、牡丹皮を加う。○吐血、咳嗽には、四物湯を加えて、茯苓、補心湯と名づく。○妊娠の傷寒には、半夏を去り、香附を加う。

風寒に感冒し、嗽して声啞する者は、是れ寒、熱を包むなり。久嗽、声啞すると同じからず。

冷風嗽は、風冷に遇えば即ち発す。痰多く喘嗽する、是れなり。以上の二条は、俱に後方に宜し。

処方:

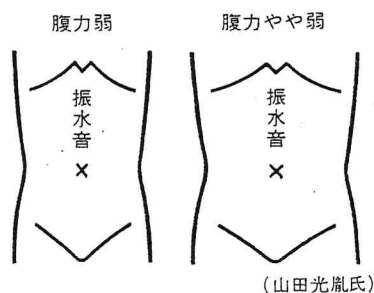
- 『太平惠民和剂局方』
半夏、茯苓、桔梗、陳皮、葛葛根、前胡、人参、大棗、紫蘇葉、枳殼、木香、甘草、生姜
- 『万病回春』(卷之二、咳嗽) 龔廷賢
紫蘇、桔梗、枳殼、陳皮、半夏、茯苓(各一錢)、前胡、乾葛(各二錢)、甘草、人参(各七分、熱咳するには之を去る)、木香(五分、氣盛んなる者には之を去る)
- 東医研(太平惠民和剂局方) 13 品目
半夏 3、茯苓 3、桔梗 2、陳皮 2、葛根 2、前胡 2、人参 1.5、大棗 1.5、紫蘇葉 1、枳殼 1、木香 1、甘草 1、生姜 0.5
- エキス剤
半夏、茯苓、桔梗、陳皮、葛根、前胡、人参、大棗、紫蘇葉、枳殼、甘草、生姜 (ツムラ)
半夏、茯苓、桔梗、陳皮、葛根、前胡、人参、大棗、紫蘇葉、枳殼、木香、甘草、生姜 (大虎堂)

適応症状:

- 「香蘇散の目標に準ずるが、経過の長引くもの」(風邪の漢方治療)
「胃腸が弱く感冒を契機に発作が起こるものによい。原典『』には以下に述べるように喘息に有用な木香・陳皮を含むが、エキス製剤には木香がない。」(気管支喘息の漢方治療)
『漢方診療のレッスン』花輪壽彦
- 「胃の弱い人で葛根湯や桂枝湯が胸につかえると云う、感冒に咳嗽を兼ねたものによい。感冒、気管支炎、肺炎、酒毒、気鬱、阻悪(神経症、神経性不食症、悪心)に適用される。」
『漢方治療百話』矢数道明
- 「平素胃腸が弱く胃下垂ぎみの人の風邪で、胃部のつかえ、吐き気、水を吐くといった胃症状があつて、頭が痛い、発熱、咳、痰、鼻水といった風邪症状が加わったようなとき、風邪の長引いた時に用います。」
『漢方処方と腹診』木下繁太郎
- 「感冒による咳嗽、各痰あるいは悪心・嘔吐・腹部膨満などに使用」「脾気虚、痰湿を呈するもの」
『中医処方解説』神戸中医学研究会

証:

舌診所見: 舌質は淡紅・舌苔は白から白膩(『中医処方解説』)
脈診所見: 浮緩(『中医処方解説』)。浮弱(『漢方処方と腹診』)
腹診所見: 瘦せ型ないし中肉型で、腹力弱ないしやや弱である。心窩部に軽度の振水音を認めるものもあるが、腹力が甚だしく弱くいわゆる軟弱無力で、心窩部に顕著な振水音を認めるものには、用いられないことがある。『漢方処方と腹診』



処方解説:

(解表) 紫蘇葉・葛根・前胡・生姜
(補気) 人参・茯苓・甘草・大棗
(去痰・止咳) 半夏・桔梗
(理気) 木香・枳殼・陳皮

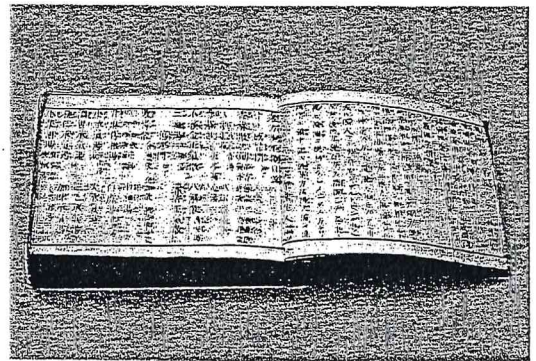
二陳湯(半夏、茯苓、陳皮、甘草、生姜)を基礎に構成されているとも考えられる。

紫蘇葉・葛根・前胡・生姜は、発熱状態では発汗に働き解熱させる。紫蘇葉・生姜は温性で葛根・前胡は涼性であるところから、表寒・表熱のいずれにも適応する。葛根・前胡は強い解熱作用をもつ。紫蘇葉・生姜は去痰に働くほか、胃液の分泌を促し胃腸の蠕動を強め、悪心・嘔吐を止める。葛根は項背部の筋肉の緊張を緩解し、下痢を止める。前胡は強い去痰作用をもち軽度の鎮咳作用もある。半夏は、中枢性・末梢性の鎮咳作用をあらわし、去痰に働くほか強い制吐作用と胃腸蠕動の調整作用をもつ。桔梗は去痰・鎮咳に働くほか整腸作用がある。木香・枳殼・陳皮は、胃腸の蠕動を促進して腹部膨満・腹痛を除く。木香は抗菌作用をもち止瀉に働き、陳皮は去痰作用をもつ。人參・茯苓・甘草・大棗は消化吸収機能を高め、全身の機能を促進し抵抗力を強める。茯苓は組織や消化管内の余剰水分を血中に引き込んで利尿によって除き、気道の分泌を減少させ消化管内の溜飲を除き下痢を止める。甘草・大棗は平滑筋痙攣を抑制して腹痛を止め、諸薬を調和させる。

(『中医処方解説』)

● 衆方規矩／曲直瀨道三(1507～1594年)

- 1) 参蘇飲は四時の感冒で発熱、頭痛し、咳嗽、停飲^①があって、中脘^②が痞満し、嘔吐し、痰水を吐くものを治す。この剤は腹中を寛くし、胸を快くして、脾胃^③を傷らず、一切の発熱および内傷、外感、もろもろの咳嗽、痰喘するもの、あるいは勞瘵^④になろうとするものなどを治す。
- 2) ○初めから咳嗽するものには、桑白皮、杏仁を加える。
 - 久嗽には五味子、烏梅を加える。
 - 口乾には麦門、天花粉を加える。
 - 嘔逆には藿香、砂仁を加える。
 - 脾泄^⑤には蓮肉、白扁豆、白朮を加える。
 - 頭痛には川芎、細辛を加える。
 - 感冒で悪寒し汗なく、咳嗽して喘ぐもの、また傷風で汗があり、鼻が塞がって声が重く、咳嗽するものには、ともに麻黄、杏仁、を加える。
 - 肺に多く熱があれば^⑥杏仁、黄芩、桑白皮、烏梅を加える。
 - 肺が寒で咳嗽^⑦するものには、五味子、乾姜を加える。
 - 心下がつかえ、あるいは胸が煩熱するもの、あるいは酒がもたれて散じないもの、あるいは、嘈雜、悪心するものには黄連、枳実を加え、葛根、陳皮を倍にして用いる。
 - 胸が満ち、痰が多いものには括囊根を加える。
 - 気が促^⑧って喘嗽するものには知母、貝母を加える。
 - 衄血には烏梅、麦門、茅根^⑨を加える。
 - 心が盛んで発熱^⑩すれば柴胡、黄芩を加える。
 - 咳嗽して血を吐くものには升麻、牡丹皮、生地黄を加える。
 - 勞熱、咳嗽が久しく癒えないものには知母、貝母、麦門を加える。
 - 妊娠時の傷寒には半夏を去って香附子を加える。
 - 陰虚で痰があり、嗽あるいは吐衄^⑪するものには、四物湯を合して用い、茯苓補心湯と名づける。
- 3) 四時の咳嗽、風痰^⑫で胸が痛むものに参蘇飲を用いると、脾胃をやぶることなく飲食を進め、気を順らすのでよく、また風邪のひきかけに用いる。したがって、新しい病には2味を去って黄芩、柴胡を加え、内外の熱を退けるのである。しかし、久しい病で衛氣^⑬が虚するとき、人參を加えて気を補い順らすべきであり、また心気が弱いときは、木香を加えて気をのびやかにするのである。



■ 衆方規矩

[1]

- ①停飲(ていいん): 水飲。
- ②中脘(ちゅうかん): 胃部。
- ③脾胃(ひい): 胃腸。
- ④勞瘵(ろうさい): 肺結核など。
- ⑤脾泄(ひせつ): 下痢。
- ⑥熱証の咳。
- ⑦寒証の咳。
- ⑧少陽の熱など。

- ⑨吐衄(とじく): 衄は鼻出血であるが、ここでは咯血を指す。
- ⑫風痰(ふうたん): 平素から痰疾のあるものが、風邪を受けて起こした病。痰疾とは痰涎が体内に停留して起こると考えた病証。
- ⑬衛氣(えいき): 身体の外を守るもの。
- ⑭瘧疾(ぎゃくしつ): マラリア。
- ⑮寒(かん): さむけ。
- ⑯五心(ごしん): 両手掌、両足脛および頭上(または胸部)。
- ⑰痰(たん): 水飲、水腫。
- ⑱驚風(きょうふう): ひきつけ。

- 4) ○表熱が甚だしいものに木香を加えて用いると、斑が出ることもある。そのため、他の医師は必ず木香を去って用いるのである。
- 傷寒で7～8日経過し、熱が内に入って妄語し、口が乾き、脈数のものには解毒、涼膈などの方を与えても効果がない。参蘇飲に黄芩、黄連を加えて与えれば表裏の熱が退き、二便が通じて癒える。
- 瘧疾^①でその熱が多く、寒^②が少なく、咳嗽を伴う証に黄芩、羌活を加えると奇効がある。
- 喘息で痰が多く、喉中で水雞が鳴くようになるものには杏仁、五味子を加える。
- 勞瘵で嗽が出、汗なく、潮熱、五心^③の煩熱があるものには地骨皮を加える。
- 小児が痰^④によって嗽が出、初めて驚風^⑤の発作を起こしたときによい。生まれつき虚弱な場合には人參を入れ、あるいは風邪をひいて発熱し、頭が痛み、嗽をして痰があり、喘息、痞悶するものにはもっぱらこの方を用いる。

牛山活套／香月牛山(1656～1740年)

- 1) 感冒の症で熱が甚だしく悪寒し、咳嗽が甚だしく咽痛し、声音が重濁するもの、あるいは声が嘎れて出ないなどの類には参蘇飲を用いる。まだ鼻が塞がって咳嗽し、あるいは鼻に清涕を流すものにも参蘇飲がよい。その脈は多く浮濇である。
- 2) 四時の感冒には、おしなべて香蘇散、参蘇飲、敗毒散^①を用いるとよい。これらの薬を用い、5、6貼で熱が解し難いときは、軽い感冒とはいえないので、傷寒、瘟疫^②の治を施すべきである。
- 3) 四時の感冒は、多くは咳嗽を兼ねるものである。発熱、悪寒して痰を吐くものは参蘇飲を用いる。
- 4) 総じて咳嗽の療治は、四時ともに参蘇飲を加減して用いる。
- 5) 総じて喘息の治は、初発時にはまず参蘇飲を用いる。

〈文責者／長谷川弥人〉

方読弁解／福井楓亭(1725～1793年)

参蘇飲は、元來外傷、内傷を兼ねた症に用いる方で、風邪によって咳嗽し、気色が悪い場合に用いるもので、強いて発汗させる剤ではなく、小青竜湯の場合のように、表症があって心下に水飲がある咳に用いるものではない。また補肺湯^①のように、肺氣不足によって痰がなく咽が乾燥し、声が枯れて咳が出るものの肺を滋す方ではなく、また華蓋散^②のように、水飲がなく、肺冷によって咳をなすものを発散する方とも異なる。

[5]

- ①敗毒散(はいとくさん)：人參敗毒散。
②瘟疫(うんえき)：急性感染症の総称。

[6]

- ①補肺湯(ほはいとう)：桑白皮、麥門冬、乾姜、桂枝、欬冬、五味子、粳米、大棗の8味(千金)。
②華蓋散(かがいさん)：麻黃、桑白皮、蘇子、杏仁、陳皮、茯苓、甘草の7味(和劑局方)。

適応症：感冒、インフルエンザ、上気道炎、胃腸炎、慢性胃炎、慢性腸炎

類似処方鑑別：

1. 葛根湯

比較的体力のある人の感冒の初期で、悪寒、発熱、頭痛、項背部のこわばりなどが有る場合に用いる。

2. 香蘇散

胃腸虚弱の人の感冒、その他の発熱初期で、不安、不眠傾向がより顕著な場合に用いる。

3. 小柴胡湯

体力中等度の人で、微熱が長引き、胸脇苦満があり、咳や痰が多く、口中不快感、食欲不振などがある場合に用いる。

4. 柴胡桂枝乾姜湯

体力中等度以下の人の感冒で、小柴胡湯の使用目標に準じ、動悸、盗汗、不眠、不安などを伴う場合に用いる。

症例：

.....
衆方規矩／曲直瀬道三(1507～1594年)
.....

- 1)ある人が7日にわたって衄血^①し、顔面が赤く、他の医師が治療したが効がない。脈を診ると浮数である。よって参蘇飲に川芎、木香、側柏葉、黄芩を加え、5貼を与えると全治した。
- 2)30余歳の男子が咳嗽が出、昼夜に4～5度も泄瀉^②し、口が乾き、胸苦しく、肌熱がある。参蘇飲から半夏、枳殻を去り、栝蒌根、白朮を加えて与えると治った。

.....
井見集 附録／山田業精(1850～1907年)
.....

- 1)24歳の女性が感冒に罹ったが、頭痛が甚だしく、大抵は午後になると劇発し、その痛みは常に前脳にあり、発するときは冷水中に頭を浸してこれをしのぐという。また、頭痛が軽いときは胸中が痛悶し、胸痛が軽いときは頭痛が甚だしい。その症は、渴して冷水を欲し、小便は数で、大便はしぶり、時々悪寒し、微しく咳し、あるいは四肢酸疼、あるいは骨節が疼み、舌上に微白苔があり、脈は浮緊数、腹中が微し拘急している。そこで芎藭散^③を投ずると、頭痛は大いに去ったが、胸中の苦悶が甚だしく脇下が痛むので、大柴胡湯に転ずるとその症は去った。同方を数日間続用すると、頭痛が再発し、日夜眠れなくなって気宇が鬱閉し、食思なく、咽中が痛み、結喉辺に小瘡を發した。さらに咳嗽が甚だしく、胸中の苦悶がことに甚だしい。よって参蘇飲合四物湯を与えると、6貼で諸症が大いに去り、食も進むようになったので、続用すると全治に至った。参蘇飲合四物湯は、『万病回春』に茯苓補心湯と名づけてあり、咳嗽、痰血を治すという。古人が、脳と心とは相応ずといったのはまことに至言であり、『回春』がこの方を補心と名づけたのも、大いに味わいがある。
- 2)60歳の男が入浴をして頭を温水で洗い、次の日に外出したが、その日はたいへん寒く、皮膚が粟起するのを覚えた。その夜から左肩胛および左耳の後が拘痛し、続いて腹脇の左が拘攣して腰部に引き、両脚は微しく麻痺し、微しく痰嗽し、時々悪寒したが二便および食思は平常である。診ると脈は弦数、舌苔は沈香色で滑、肌表に微熱があり、全腹は拘攣して満脹、動氣(悸)が甚だしい。そこで参蘇飲を投ずることにしたが、耳後から肩項にかけての強痛に苦しんでいるので、方中の葛根を多量に加入して与えると、3貼で大いに功があり、全部で6貼を投じたところで休薬した。
- 3)26歳の妻女が妊娠6ヵ月のとき、咳して吐食、吐水し、頭が痛んだ。脈急数で、舌上に微白がある。二陳湯を与えると、吐はまったく止まったが、頭痛、咳嗽がやまないのので、参蘇飲加杏仁、桑白皮を与える

.....
(文責者／長谷川弥人)